

# 南河内における中世城館の調査

2008.3

大阪府教育委員会

# はしがき

大阪府は摂津、河内、和泉の三国からなり、さらに河内国は北河内、中河内、南河内に三区分されます。

河内は鎌倉時代末期に、南河内の豪族の楠木正成とその一族が、下赤坂城・上赤坂城、千早城に立て籠もり、幕府打倒のため蜂起したことから、主戦場となりました。

室町時代になると、河内の守護は三管領のひとつ畠山氏となり、養子の畠山政長と実子の畠山義就が争い、河内はその争奪の舞台となりました。その後も三好氏の台頭を経て織田信長の上洛を迎えるまでの間、生駒山の山裾には多くの城館や砦が築かれ、日本史の表舞台を飾る遺跡が多くみられます。

大阪府教育委員会では、これらの歴史的に重要な遺跡について、計画的に保護し、活用をはかるべく、中世城館等の調査を計画し、平成18年、19年の2ヶ年で南河内の中世城館について調査を実施いたしました。

その結果、これまで十分把握できていなかった城館跡の現状や範囲等が明確になり、本地域における中世の城郭ネットワークを解明するための基本的な資料をまとめることができました。本書が本地域の中世史研究のみならず、今後の文化財保護行政に活用されるものと期待しています。

最後になりましたが、市町村教育委員会文化財保護行政主管課各位や調査にご指導、ご協力いただいた皆様に対して厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 富尾昌秀

# 例 言

- 1 本書は、大阪府南河内地域の中世城館の分布調査報告書である。
- 2 調査は、大阪府教育委員会の依頼により、新大和川の南に位置し、旧河内国に所属する松原市教育委員会、羽曳野市教育委員会、藤井寺市教育委員会、堺市教育委員会、大阪狭山市教育委員会、富田林市教育委員会、河内長野市教育委員会、太子町教育委員会、河南町教育委員会、千早赤阪村教育委員会の協力によって、平成18(2006)年7月20日より本報告書の発刊にいたるまで中世城館の基礎的な調査を実施した。
- 3 執筆は、各担当者が分担して行い、文責は文末に記載した。編集は藤井寺市教育委員会山田が行った。
- 4 本書の作成にあたり、以下の方からご指導、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。  
白杉一葉、鋤柄俊夫、中山経正、平野 淳、正岡大実、吉井克信、大阪府立公文書館、高野山霊宝館、長岡京市教育委員会(敬称略)
- 5 本書は300部作成し、1部あたりの作成単価は2,835円である。

# 目 次

第1章 調査の目的と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
1 南河内地域の地理的環境	2
2 南河内地域の歴史的環境	4
第3章 調査の概要	6
1 南河内中世城館調査の方法	6
2 南河内地域の中世城館調査の概要	7
3 南河内における中世前半期の土器概観	14
4 南河内における中世後期の土師器皿	22
第4章 中世城館調査	27
1 中世城館一覧表と分布図	27
2 調査資料	43
第5章 南河内における中世の様相	195
中世都市葛井寺の門前を歩く	195
千早谷の中世山城 - 城郭遺構の検討 -	206
狭山神社遺跡の土塁と半田城	211
烏帽子形城について	215
墳丘にみられる中世城郭遺構 - 前方後円墳を利用した城郭について -	222
丹下城とその周辺	227
鑄造技術者の様相と村落の一考察 - 余部・日置荘遺跡を中心として -	239
二上山麓の凝灰岩石切場について	245
水分神社考 - 地域の御社から考える中世世界 -	252
密教法具研究の新展開 - 土器製六器・二器の研究事例から -	257
河内長野の修験道関連遺跡	266

# 目 次

第1章 調査の目的と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
1 南河内地域の地理的環境	2
2 南河内地域の歴史的環境	4
第3章 調査の概要	6
1 南河内中世城館調査の方法	6
2 南河内地域の中世城館調査の概要	7
3 南河内における中世前半期の土器概観	14
4 南河内における中世後期の土師器皿	22
第4章 中世城館調査	27
1 中世城館一覧表と分布図	27
2 調査資料	43
第5章 南河内における中世の様相	195
中世都市葛井寺の門前を歩く	195
千早谷の中世山城 - 城郭遺構の検討 -	206
狭山神社遺跡の土塁と半田城	211
烏帽子形城について	215
墳丘にみられる中世城郭遺構 - 前方後円墳を利用した城郭について -	222
丹下城とその周辺	227
鑄造技術者の様相と村落の一考察 - 余部・日置荘遺跡を中心として -	239
二上山麓の凝灰岩石切場について	245
水分神社考 - 地域の御社から考える中世世界 -	252
密教法具研究の新展開 - 土器製六器・二器の研究事例から -	257
河内長野の修験道関連遺跡	266

## 狭山神社遺跡の土塁と半田城

植田 隆 司

大阪狭山市域には、池尻城と「半田城」の2つの中世城郭があったとされている。池尻城については、大阪府教育委員会の発掘調査によってその主要部分の実態が明らかになっているが、半田城に関してはその実態がまったく判明していない。『日本城郭大系』第12巻大阪・兵庫では、大阪狭山市半田に所在する式内社の狭山神社に北接するエリアをその推定地とし、中位段丘崖の落差を防御地形として利用する中世城郭である旨が記されている<sup>(1)</sup>。また、現地には「シロノサカ」と通称する地名が狭山神社の北方に残っており、南北にのびる中位段丘崖を北西から南東へ昇るこの坂を半田城に至る道と解釈することもできる。建武4年・延元3年(1338年)に記された「高木遠盛軍忠状案」<sup>(2)</sup>には、前年に河内国高木遠盛が南朝に味方して和泉国や河内池尻・半田を転戦した旨が記されており、池尻城と並んで半田付近が戦略上の拠点となっていたことが伺われる。また、明応年間には埴田右近が半田城を居城したとも伝えられるが、詳細は不明である。『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』では、狭山神社からその北方に位置する「シロノサカ」を含む付近までを埋蔵文化財包蔵地の「狭山神社遺跡」とし、それに北接する南北約100m・東西約200mの偏楕円形のエリアを「半田城跡」として取り扱っている。

この周知の埋蔵文化財包蔵地「半田城跡」の範囲内においては、最近20年間においても大きな開発の動きはなく、稀に個人住宅の新築・増築等で立会調査を実施する程度である。その際の土層観察では、中世城郭に関するような遺構・遺物が確認されたことはなく、残念ながら半田城に関わる考古学情報を得ることがない。

ところで、埋蔵文化財包蔵地「狭山神社遺跡」の中に含まれる狭山神社の宮山は、「シロノサカ」と同じ中位段丘崖の斜面とその上部平坦面にある林で、神社拝殿から遙拝する聖地として区画管理され、近現代の開発をほぼ受けることなく良好な環境が維持されている。昭和63年に関西大学文学部考古学研究室の参加を得て、大阪狭山市教育委員会が実施した測量調査では、一辺約60m・高さ約1mの土塁が、平行四辺形を呈する平面形状に廻り、宮山の平坦地約3,600㎡<sup>(3)</sup>を区画していることが判明した。土塁は外側と内側の2列で巡っており、本稿では外側のそれを土塁1、内側のそれを土塁2と呼び分けることにする。測量調査では土塁1の内側と外側に深さ約50cmの溝が巡っていると報告されている。また、測量調査時の表面採集遺物等には平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に焼成された瓦があり、同報告では、神社境内に寺院が所在していたことを示唆する遺物であるとの見解が示されている。

平成元年には、狭山神社宮山の土塁の実態等を解明すべく、大阪狭山市教育委員会によって学術発掘調査が実施された<sup>(4)</sup>。結果、中世期の遺構として、土塁のほかにも基壇状遺構・焼土坑等が検出された。土層観察の結果、土塁1の高さは約80cmで、土塁2の高さが約70cmと外側の土塁1に較べて若干低いことが判明した。土塁は灰褐色砂礫土の地山を削り込んで基底を形成し、その上に締まりが悪い暗黄灰色砂質土を盛り、さらに固く締まった明黄褐色砂質土を盛り上げているようすが確認されている(図246)。基壇状遺構と報告されている高まりは、土塁で区画された平坦面のほぼ中央付近に広がっているようで、平面で方形を呈し、

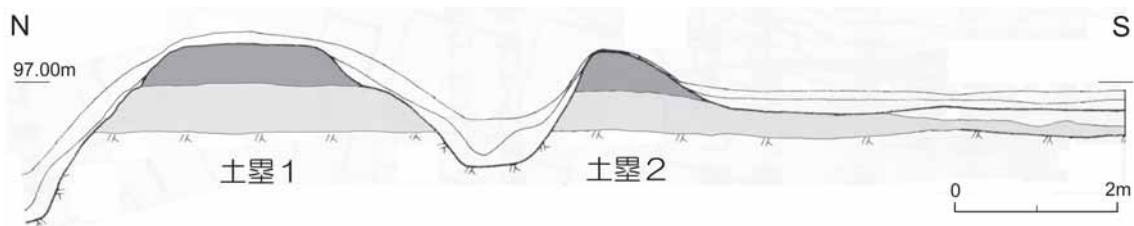


図252 狭山神社遺跡宮山土塁断面復元図(1990報告書より作成)

現存する高さは約40cmで、その盛土は暗灰褐色シルト層と報告されている。また、その近辺では、長さ1.5m・幅1.1・深さ0.4mの焼土坑が検出されていて、狼煙台ではないかと推定されている。ほかに、鑄造遺構と推定されている焼土坑も検出されている。また、中世の出土遺物としては、三つ巴文と1重の圈線で構成される文様をもつ軒丸瓦と、均等唐草文の軒平瓦が少量出土しており、いずれも平安時代から鎌倉時代にかけての時期に比定されている。ただし、報告では対応する遺構が確認されていないために、これらの瓦が他の場所から運ばれてきたものであるとの見解が述べられている。つまり、土塁およびそれに護られた平坦部の諸施設は、鎌倉時代以前の遺構であるとの確証はなく、南北朝期頃の使用を想定する余地もあるといえよう。

たとえば、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、狭山神社宮山の平坦部に寺院が造営され、これに伴う遺構が基壇状の高まりや土塁であったとしても、この場所が有する防御的機能を見込んで、同時期あるいは南北朝期に「城」として活用された可能性がのこる。千早城や赤坂城に代表される南北朝期の山城の祖型と、山岳寺院の伽藍との関係性もあるという<sup>(7)</sup>。であるならば、狭山神社宮山が寺院として用いられていたとしても、それはこの地の城郭としての機能を否定するものではないはずだ。当該地点は、中位段丘の西端にあるので西側の崖が自然の要害をなしており、南北と東に土塁を築けば四方からの攻撃に備えることができる。また、土塁が現存する約80cmの高さであったとしても、その高みを遮蔽物として内から外へ向けて有効な弓射が可能である。さらに、土塁の頂部に柵列等を備えれば、外敵から土塁の内側を完全に防御できる。発掘調査で検出された焼土坑が、狼煙台の痕跡であるならば、このエリアの寺院としての機能よりも、城郭としての機能のほうがより重視されるべきであろう。

前述したように、埋蔵文化財包蔵地「半田城跡」の範囲内においては、半田城に関わる遺構・遺物が確認される可能性はきわめて低いと判断される。ならば、狭山神社宮山の土塁で

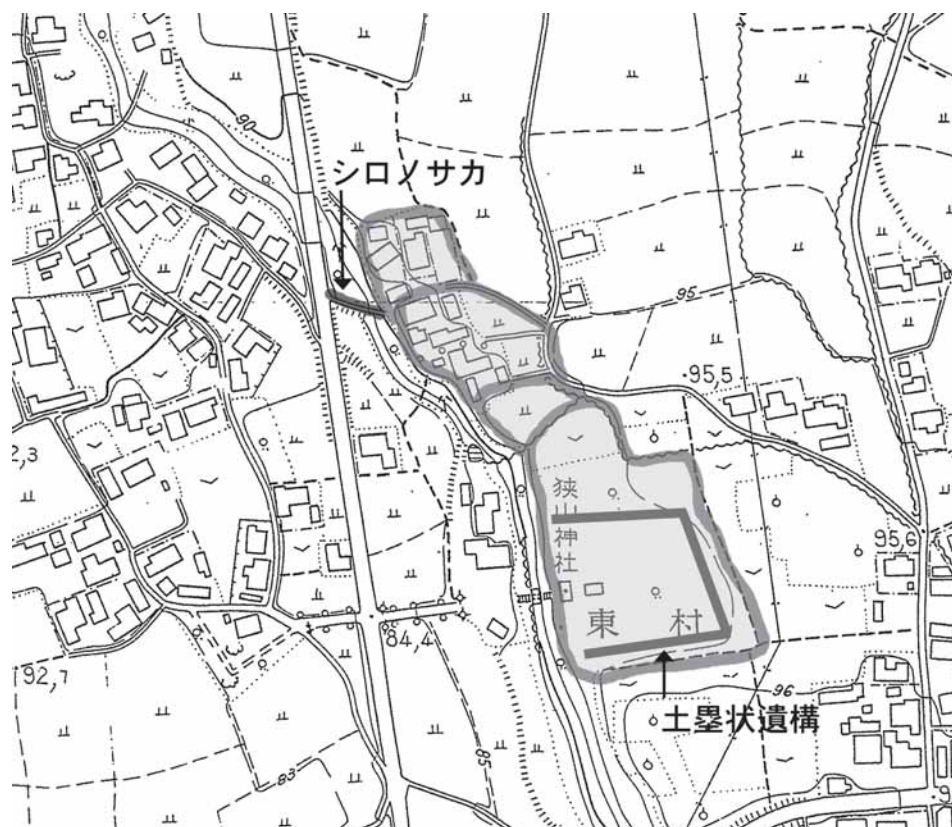


図253 宮山の土塁区画を本郭とした半田城の範囲想像図

防御区画された3,600㎡の平坦部に、半田城の本郭の配置を推定し、通称地名「シロノサカ」が残る地点付近までの段丘崖上に、それに連なる郭を想定するのがもっとも蓋然性が高いと私は考える(図247)。狭山神社宮山から北へ向けて、中位段丘は緩やかに傾斜しており、相対的に高所となる宮山近辺に城郭の中核機能を配置するのが妥当であろう。「シロノサカ」は、この連郭式に似た半田城の段丘斜面に沿って、あるいは連郭のいずれかに取り付く形で設けられた道のなごりではなかろうか。狭山神社宮山を本郭とする半田城を想定すると、その土塁で防御された郭から、東側を南北に伸びる中高野街道までは指呼の間である。また、平安時代からその場所に大幅な変更がないとされる狭山神社参道の延長線上には、西高野街道と天野街道がある。さらに、シロノサカを出て旧道を北進すれば、狭山池東岸に沿って狭山池北堤付近で中高野街道と合流することができる。狭山池北西の中高野街道を押さえる地には池尻城が築かれており、交通の要所にある半田城はその地理的特性を駆使して池尻城と連携を図ることもでき、また彼の城と敵味方に分かれた場合は、その付け城として威力を發揮したであろうことは想像に難くない。

(うえだ たかし / 大阪狭山市教育委員会)

【註】

- (1) 『日本城郭大系』第12巻 大阪・兵庫，新人物往来社，1981年
- (2) 『大阪狭山市史』第12巻 地名編，大阪狭山市史編さん委員会，2000年
- (3) 『大阪狭山市史』第2巻 史料編 古代・中世，大阪狭山市史編さん委員会，2002年
- (4) 『大阪狭山市埋蔵文化財分布図』，大阪狭山市教育委員会，2001年
- (5) 楓仁孝・市川秀之・中村弘『狭山神社遺跡測量調査報告書』大阪狭山市文化財報告書2，1989年
- (6) 中村弘『狭山神社遺跡試掘調査報告書』大阪狭山市文化財報告書3，1990年
- (7) 『池尻城と南北朝の動乱』，狭山町立郷土資料館，1987年